第４章

台湾の本土化後にみる外省人意識

上 水 流　久 彦

はじめに

1945年の日本の敗戦以後，台湾には中国国民党（以下，国民党）とともに約100万人（そのうち，軍人は約60万人）が中国本土（大陸。以下，同様の表記）[1]から台湾に移り住んできた[2]。彼らやその子孫は外省人と称され，称するようになる[3]。そして，戦後の台湾社会に，外省人と本省人（日本植民地以前から台湾に移住した者を祖先にもつ漢人の人々）との対立，外省人の政治的優位性等の省籍問題をもたらした。そこで本章では外省人の視点から台湾の求心力と遠心力を論じ[4]，第１世代を含めた外省人が本土化（後述）を批判する形で台湾社会の構成者という認識を強くもっていることを，主に彼らのなかでも台湾の独自性を強く否定する人物への聞き取り調査を通じて明らかにする[5]。

ただし，構成者という認識は，先行研究等で一部指摘されているような文化的な「台湾化」すなわち台湾文化（主に台湾人口の約７割を占めるとされる中国の福建出身者を祖先にもつ閩南系本省人の）への同化，肯定を必ずしも意味しない。むしろ，構成者という認識は台湾の豊かな居住空間や自由な政治的経済的環境と，そのような台湾社会の構築における外省人の貢献によって確保されている。さらに構成者という認識は大陸との接近・接触によって強化された。

構成者という認識は大陸からの移住者が多く集住する眷村（外省人の集住地区，第4節で詳述）の文化遺産としての保存活動の検討や，韓国華僑の台湾認識と比較することでいっそう明らかとなる。眷村は，外省人の外省人による外省人のための居住地区だと高齢の本省人を中心にとらえられており，高齢本省人は眷村を一般的に台湾において異質な空間だとみなしている。一方，多くの外省人も外省人と関係が深い場所だと考えている。それゆえに眷村を外省人がどのように位置づけているかをみることは，彼らの台湾への感情や高齢の本省人との認識の違いを知るうえで重要な手がかりとなる。

韓国華僑は台湾ではなく，中華民国にアイデンティファイする点で外省人に似た国家アイデンティティをもつ。似た国家アイデンティティをもつ両者の台湾への感情を比較することで，外省人の特徴をいっそう浮き彫りにできる。

ところで，外省人の自己認識が本省人と異なることはこれまで多く論じられてきた。社会科学的な研究としてはまず胡台麗の研究がある。国民党とともに台湾に来た「下級の軍人退職者」（栄民）を分析した彼女によれば，外省人は大陸への思いを断ち切れない感情を強くもってきた。なかでも国民党政権のために血と汗を流した栄民においてその感情が顕著であり，彼らは一種台湾社会から隔離された空間を作っていた（胡台麗［1990］）。

1990年代の台湾の政治状況とエスニックグループ（族群）間関係を分析した王甫昌は，族群によって支持する政党が異なることを報告する[(6)]。本省人のなかでも閩南系本省人が台湾中心の国家づくりを強調する民主進歩党（以下，民進党）を支持する一方，外省人で民進党を支持する者は少なく，彼らは国民党から分かれた，より統一色の強い新党を支持するという（王甫昌［1998］）。族群の違いと，仕事や階層との関係を台湾の男性について分析した蔡淑鈴は，「国語」という標準中国語を話す機会が多い外省人の場合[(7)]，比較的地位の高い職業に就くことが閩南系本省人より多いと指摘する。1990年代初期の調査では明らかに外省人が軍人，公務員，教員になる比率が高かった（蔡淑鈴［2001］）。

これらとは異なる見解を示したのが高格孚（コルキュフ）である。彼によれば，現在，台湾で生まれ育った外省人の２世，３世も増え，台湾を自らの故郷であると考える外省人も増えたという。また「反攻大陸」を掲げる国民党を信じた第１世代の外省人でさえ，その多くが祖国に戻ることは叶わない現実を受け入れているという（高格孚［2004］）。外省人のなかには台湾独立を主張する２世，３世さえもいる。コルキュフの指摘は外省人の台湾への土着化ともいえ，それを台湾趨向性と彼はとらえる[8]。台湾趨向性の代表的特徴は「中華民国在台湾」（中華民国は台湾にあり）という考えを受け入れ，台湾に帰属しているという自己認識を形成し，本省人総統誕生を自然な流れと考える点にある。

だが，コルキュフの分析に対しては一部の外省人から承認できないという強い批判が出た（何［2008］）。他方，独立推進派の本省人インフォーマントは「もし台湾がなければ，外省人や国民党は殺されて今は存在していないでしょう」と，今もなお外省人を激しく批判する。このように本省人と外省人との溝は埋まったとは言いがたい状況にある。

このような状況にこそ外省人を本章であらためて取り上げる意義が存在する。以下では，「外省人はやはり本省人と異なるのか，それともすでに土着化したのか」や「彼らは中華民国を支持するのか，台湾独立を支持するのか」という，これまで多く議論されてきた問いかけとは異なった角度から台湾の独自性を否定する外省人を分析し，台湾社会を構成する者としての外省人の意識を示す。

本章の展開は以下のとおりである。第１節で台湾の中国化と本土化について説明し，第２節ではインタビュー調査から本土化が外省人に与えた影響を論じ，第３節では外省人の大陸接触経験が彼らの台湾への愛着を支える要因となっていることを指摘する。第４節では眷村の保存活動を通して外省人の台湾認識を示し，第５節では中華民国という国体を支持する点で外省人と類似する韓国華僑との比較から外省人の台湾認識の特徴を提示する。最後に「まとめ」において，筆者の取り上げる外省人の台湾認識が台湾社会を構成

する者としてであることを指摘し，既存の研究が指摘する外省人の台湾化とは異なる外省人分析を示す。

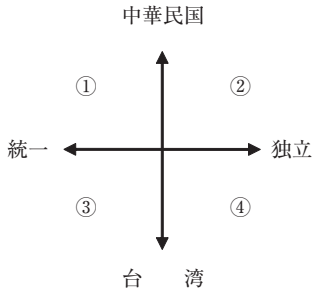
第１節　台湾の中国化と本土化

本省人と外省人の対立，漢族からの先住民族[9]に対する蔑視等，台湾社会が解決すべき民族問題はなお存在し，その根本には国家の体制や先住民族の位置づけに影響を与える台湾の中国（中華民国）化と本土（台湾）化との対立が存在する。中国化では，本省人のもつ文化は中国一地方の文化になり，本土化ではそれが中心となる。先住民族も前者においては庇護される少数民族であるが，後者では中国に還元されないさまざまな民族が存在する多元的台湾の証明となる。中国化と本土化というこれらの経験を経て現在，外省人は台湾社会をどう考えているのだろうか。そこで最初に中国化と本土化について述べる。

台湾に政治的実体として存在する中華民国は，日本の第２次世界大戦での敗戦，国共内戦での国民党の敗北と台湾への敗走の結果によって生まれた。だが，外省人，本省人，先住民族の国民統合は容易なものではなかった。とくに陳儀をトップとする終戦直後の台湾における統治の混乱（インフレーション，賄賂の横行等）は，国民党への本省人の失望を招き，その後発生する二二八事件[10]，白色テロ[11]は，本省人と外省人との溝をいっそう深めた。

結果，現在，中華民国は，大陸との統一を志向するベクトルと台湾の独立を志向するベクトルとの対立軸，中華民国へのアイデンティファイと台湾へのアイデンティファイという対立軸のなかで国家のあり方が問題となっている。図１において，①は中華民国を支持し，大陸との統一を希望する者である。②は中華民国の独立を希望する者で，大陸との統一は必要としない。③は台湾にアイデンティファイするが，大陸との統一を望むという者で論理的に存在しえない。最後に④だが，中華民国自体を否定し，台湾として独立を

図１　アイデンティティのベクトル



（出所）筆者作成。

希望する者である。

国民党の本来の党是は①である。台湾という名前で国際連合加盟を求めた陳水扁前総統や台湾の独立を求めるグループが④に該当する。基本的にはこの２つが台湾社会で対立軸となっている[12]。

④は政治面だけでなく，文化的にも教育的にも台湾の本土化と深く関連する。台湾の本土化とは，大陸ではなく台湾にアイデンティティをもち，台湾に基盤をおいて政治，文化の制度を作り替えていく一連の運動や流れである。1970年代頃の本土化という言葉は単純に土着化ということを意味する言葉であったが，1990年代半ば以降において本土化は土着化というよりも，台湾化という意味合いを強くもつようになった。そして，本土化は後述するように外省人の自己認識に国家の構成員という点で大きな影響を与えた。

国民国家の構成員である国民とは辞書的には当該国家の国籍をもつ者である。理念的には政治的に同じ権利をもち，文化的にも同一性をもつ。だが，出身や職業，身分，文化的背景等の違う人々が文化的同一性を自然にもつことは不可能であった。それゆえに「国民国家は，全国民に共有させる共通の言語，共通の歴史，共通の法，共通の議会，共通の権利等を生み出し，共通の価値観と生活様式を再生産する共通の国民教育をつくりあげた」（小熊［1998: 634-635］）。すなわち，国民を生み出す装置が必要であった。具体的には共通言語を身につけさせる国語教育や，同じ歴史観を育む歴史教育等である。

戦後，国民党は国家統合を中国の正統な継承者としての立場から実施しようとした。台湾の中国化である。たとえば，言語では新たに中国語を国語と定め，学校では閩南語や客家語等母語の使用を禁じた。また教育では台湾ではなく，大陸を中心とした地理や歴史の教育を行った。政治面では，国民党にとっては中華民国の領土は大陸を含むものであり，首都は南京であった。したがって台北は臨時首都に過ぎなかった。本省人エリートは日本人による教育を受けており信用できないということから，とくに中央政治では外省人の登用を重視した。また立法委員（国会議員に相当）も国共内戦の折に大陸で選ばれた者（大陸の選挙区の代表）がそのまま1992年の全面改選まで国会議員であった。

中国化の状況は1980年代に始まる民主化以降，蒋経国が民進党の結成を容認し，李登輝が蒋経国の死去にともない副総統から総統になって急速に変化した。李登輝は本省人を中央官庁の長に積極的に登用し，重要なポストに任命される本省人が増えた。かつ立法院（国会に相当）の全面改選を行った。これにより多くの本省人が政官の世界で活躍するようになり，少数の外省人が多数の本省人を統治するという矛盾が解決されるようになった。政治の本土化である。

教育においても，大陸を中心とした内容が見直され，台湾に重点をおいた教育（たとえば，台湾を知るための教科書の作成と授業の実施，郷土教育の推進等）が進められ，公務員の試験では大陸ではなく台湾を中心とする問題が出されるようになった。文化面では台湾文化の見直しと称揚，継承が図られるようになった（上水流［2007］）。

本土化をいっそう促進したのは2000年に総統に当選した陳水扁であった。陳水扁は中華民国名ではなく，台湾名で，すなわち台湾としての国連加盟を目指した。これは名前を正すという「正名政策」の一環である。「正名政策」では，このほか，「中華」や「中国」という単語をもつ公的機関の名前の変更が行われた。たとえば，中華郵政は台湾郵政へ，中国石油は台湾中油へなどである。加えて蒋介石の称揚ともいえるものも改められた。蒋介石の名前

である「中正」に基づいて名付けられていた「中正国際空港」や「中正紀念堂」をそれぞれ「台湾桃園国際空港」や「台湾民主紀念館」に改名したことがこれに該当する。さらに各地にあった蒋介石の像も撤去された。これらの政策の背景には，台湾は中華民国の一部でもなく，中華民国でもなく，台湾であるという本土化の意識が強い。

したがって，台湾名での国連加盟等これらの政策は本土化の支持者，なかでも台湾独立派から歓迎された。その一方で，「台湾は中華民国である」，または「台湾は中華民国の一部である」という国家認識をもつ一部の外省人には後述するように大きな反発を招いた。

台湾という名の下での本土化という国家の統合強化であれ，中華民国という名の下での中国化であれ，いずれの試みも国民国家の成立の基本的要件である歴史や言語の共有化を十分には達成できなかった。たとえば，言語だが，国語を国民党来台以前から本省人が話せたわけではなく[13]，戦後の国語教育を受けていない高齢本省人のなかには，国語を話せない者も多い。また福建周辺から数百年前に台湾に移住した人々の母語である閩南語を日常的に使う者も多く，逆に閩南語をまったく話せない外省人も多い。

次に歴史だが，台湾史において重要な事件である日本の植民地統治や二二八事件への評価や認識は大きく異なる。たとえば，植民地統治について本土化を推進した李登輝は「台湾は日本統治を受けたことで，大陸にはない『公』の概念をもつようになり，それゆえに大陸とは異なる」と述べている。また，台湾の主体性を重視する民進党は2005年の「対日関係テーゼ」のなかで，日本に統治された台湾は単なる「中国の一部」ではないと述べる（『朝日新聞』2006年10月24日）。

一方，台湾ではなく中華民国という国家アイデンティティを重視する馬英九は，国民党の主席も兼務していた台北市長時代（1996～2006年），日本の植民地統治下で台湾議会設置運動を行った蒋渭水や，台湾先住民族による最大かつ最後の抗日蜂起事件である霧社事件の主導者モーナ・ルダオらの称揚を進めた。国民党は長期にわたって日本語を敵性言語としてきたが，抗日烈士

の称揚もその思想と同じである。馬英九の認識からは日本と戦った中華民国，国民党の歴史観，対日観が国家のアイデンティティの基盤となっていることが伺える。

また二二八事件に関しても外省人と本省人の理解の違いは大きい。この事件の要因について台北市長であった馬英九は「コミュニケーション上の不幸」と述べた。だが，そのような理解は筆者の調査に基づけば，身近な者が犠牲となった遺族や被害者自身にとって到底容認できるような考え方ではなかった[14]。

李登輝が総統になる以前，台湾は蒋介石らのもと，戒厳令が布かれ，政治的弾圧が実施される自由と民主主義が制限された独裁体制のなかにあった。このような体制のもと，台湾独立運動や台湾文化の主張はできず，中国化が台湾では推進された。だが，自由化と民主化が進み，そのなかで生まれてきた本土化は台湾中心の国家体制希求の運動へとつながり，強権体制のもとそれまで覆い隠されていた台湾内部の対立を浮かび上がらせた。本土化はさらに中華民国体制において優位な立場にいたとされる外省人にも大きな影響を与えた。

第2節　外省人にとっての本土化

コルキュフによれば外省人にとってもっとも許すことができない政治家は本土化を推進した李登輝である（高格孚［2004］）。本土化において本省人のなかにはコルキュフが指摘するように外省人に向かって「台湾から出て行け」と語る者もいた。「台湾の土地に愛着を感じる者だけが台湾人なのだ」とも主張された（王甫昌［1998: 11］）。しかしながら，本土化とは既述したように，台湾本島とその周辺の諸島しか統治していない実態にあわせて政治体制，そして，教育政策や文化政策を変えることであった。そのこと自体は外省人の排除ではなかった。

だが，実際には外省人の多くが，本土化を外省人の排除として受け取っていた。たとえば王甫昌は，外省人が国民党を支持する主な理由として，多数である本省人が政治的にも優勢になった場合，経済面や政治面，最終的には社会文化面においても外省人が不利になると考えたからだと述べる（王甫昌[1998: 21-23]）。実際，外省人第２世代の立法委員は戸籍法の改正の議論のなかで，「外省人が政治的にも経済的にも不利になると，父親の省籍を引き継ぐ下の世代の外省人が就職で不利な待遇を受ける」と心配した（王甫昌[2005: 96-97]）。

筆者の現地調査においてもそれは同様であった[15]。たとえば，台湾東部に住む外省人第２世代の30代男性Ａ（父親は江蘇省出身）は，自分たちの子ども（中学生）とは省籍問題についての認識が異なる理由として，本土化の経験の有無を指摘した。彼は「自分たちの子どもの世代には省籍問題は基本的に存在しない。あったとしても，それはとても軽いものだ」と語る。その理由を聞くと，「本土化を経験していないからだ」と答えた。「本土化は外省人の排除でしかなく，そのような目にあった者となかった者では感情が異なる」と語った（2010年８月調査時）。

また，台北市内に住む80歳代の女性Ｂ（江蘇省蘇州生まれ）は，2012年の総統選挙で民進党が再度政権をとるぐらいなら中国共産党（以下，共産党）による統一がましだと語った（2009年12月調査時）。その考えは2011年現在も変わっていない。彼女は2008年の総統選挙において馬英九陣営でボランティアをした熱心な馬英九支持者である。彼女は民進党のみならず，本省人が中心となる国民党でさえも支持しないと述べる。したがって，民進党や本省人中心の国民党よりも，能力がなくとも馬英九がよいという政治的立場をとる。

彼女によれば，陳水扁の時代は外省人である立場を傷つけられた時代であるという。本土化の波に逆らうことができず，受け入れるしかないと考えていたと語る。彼女は閩南語を話すことができないが，しばしば閩南語で話しかけられることに困惑していた。昔はこのようなことはなかったと感じていた（2009年12月調査時）。

2006年の夏から彼女のインタビュー調査を開始したが，その当時，彼女はたしかに本土化のなかでとまどい，どうしようもないという雰囲気をもっていた。そのような態度は馬英九の当選で大きく変化した。彼の当選は彼女に台湾社会での居場所を与えたのであり，それだけに民進党政権の復活は嫌悪すべき対象であった。

花蓮で民宿を営む40歳代の男性Cとは2009年の12月に出会った。彼は，「統一」という名前をもつ。彼は30歳前半で軍を退官した。彼は陳水扁の時代を，「なぜあそこまで我々を嫌い追いだそうとしたのか，わからない」と語った。軍隊で働いていたこともあり，一度として台湾を離れたことがない自分がどうして出て行けといわれるのかまったく理解できないと怒っていた（2010年８月調査時）。

このほか，80歳代の軍の高官であった外省人第１世代の男性D，さらには台湾の主要新聞で働いていた60歳代の男性Eとその妻F（外省人の第１世代だが，子どもの頃に台湾に渡ってきた），現在，大学院でジェンダー研究をする20歳代で第３世代の女性G（祖父は四川省出身）も，本土化について否定的な意味を見出していた。2008年から2010年にかけて聞いた話だが，彼らは本土化とは台湾に住む人々の間の亀裂を意味なく深め，対立を煽り，外省人を台湾から疎外するものと認識していた。Gは決して閩南語を覚えないし，話したくないという者である。それゆえに台湾に住むのであれば，閩南語を話さなければならないような雰囲気に大きな不満を覚えていた。

本土化の時代，陳水扁は中華民国ではなく台湾を強調し，台湾という名前での国連加盟を求め，共産党との対立はとても激しいものとなった。だが，台湾中心の国家づくりは，筆者が話を聞いた外省人には受け入れられていなかった。Gは彼女自身「四川人」と語るのだが，「先住民族の文化は別にして大陸から来た文化を除けば，何が台湾に残るのか」とまで語った（2007年８月調査時）。言葉も食も宗教も大陸から来たものでないかと，彼女はいう。

また，Aは，「台湾共和国とするなら，澎湖島や金門はどうするのか。あそこは入れないのか」と述べ，台湾という国家の考え方が統治の現状と矛盾

すると強く非難した（2010年８月調査時）。中央省庁の高級官僚（外省人２世の女性）Ｉは，陳水扁を恥知らずの人間だと強く批判した上で「台湾」と語ることを嫌い，必ず自国を「中華民国」と称し，基本的にそれを相手に求めた（2010年１月調査時）。彼ら以外のインフォーマントも「台湾」や「台湾共和国」と語ることに強い違和感を覚えていた。

したがって，筆者がインタビューしたいずれの外省人も，李登輝や陳水扁を受け入れることができなかった。「政治家」ではなく「政治屋」（政客）が族群問題を煽り，それでますます台湾社会に亀裂が入ったと語る。選挙で票が欲しいためにわざわざ族群問題を取り上げるのだとも述べた。このように考える彼らにとって本土化とは外省人への圧迫であり，排除でしかなかった。

排除と語るものの，だが，決して外省人の政治的権益が合法的に剥奪されることはなかった。また経済的に不合理に不利な立場に追い込まれたわけではない。後述するように韓国華僑は国家の政策として自由な経済活動ができないようにされたが（上水流／中村［2007］），そのような一種迫害に近い形で経済的活動から外省人が排除されたわけではない。

だが，外省人インフォーマントは，日常的に閩南語を話すことを当然視される，台湾という国家を重視する認識を求められる，本省人エリートが増え，外省人の地位が相対的に低下するようにみえる，ということ等から排除を感じとっていた。王甫昌が述べるように優位な立場からの転落という喪失感とも言い換えることができよう。

外省人インフォーマントの「排除された」という考えを理解するうえで重要なことは，国民党や外省人の台湾社会に対する貢献への，台湾社会の，とくに本省人からの軽視である。その軽視に抗議するかのように浙江省出身のＤは，階級の低い軍人を事例に次のような話を語った。「大陸から渡ってきた軍人が高齢化するが，彼らは軍事的活動ではなく，台湾の道路等社会資本の整備にかり出されるようになった。なんら労働をせずに給与を渡すことはよくないため[16]，道路建設等の肉体的に厳しい仕事に従事するようになった」。今の台湾があるのは，外省人の我々も苦労して働いてきたからだと筆者に強

調した（2010年８月調査時）。

河南省出身のＥは蒋経国の貢献が大きかったと述べる（2010年８月調査時）。それまで貧しかった台湾がこのように発展したのは蒋経国が台湾のことを考え，高速道路を造り，港を整備したからだと述べる。それまでは魚さえも満足に食べることができないような台湾であったが，1970年代に急速に発展していくようになったと語る。新竹に住む外省人２世の40歳代の女性Ｈは，「大陸から渡ってきた外省人にはとても優秀な人間がいた。彼らがいたからこそ，ここまで台湾が発展した」と述べる（2010年８月調査時）。「もちろん，最初に陳儀とともに渡ってきた人間のなかにはよくない人間もいたが，それがすべてではなかった」という。

国民党が来るまで貧しかった台湾という認識はＢにもみられた感覚であった。靴をはいている人は少なく，多くが裸足で貧しかったと彼女は語る（2007年12月調査時）。背が小さくて，でもまじめに働くという感じだったと，本省人との出会いを語る。そして，国民党が統治することで台湾は現在のように豊かになったと筆者に説明した（2009年12月調査時）。Ａは本土化の問題と関連して次のように述べる（2010年８月調査時）。「貧しかった台湾がこんなに豊かになった。そこに我々外省人の貢献もあったはずだ。しかし，経済が発展した今の段階になって[17]，本土化のもと『外省人は台湾を出て行け』という話は酷すぎる」。Ａは現在の台湾の繁栄をまるで本省人だけで作ったかのような認識については強い反感を覚えていた。Ｉにいたっては，本土化に反感をもつどころか，築き上げてきた台湾の繁栄を本土化を強く推し進めた陳水扁が壊したという様子であった（2010年１月調査時）。

このように現代の台湾社会の構築に外省人も関わったことをきちんと認めるべきだという主張を多くの外省人インフォーマントが語った。貧しい台湾から現代の豊かな台湾への発展において外省人の貢献は不可欠であったという。そこには現在の台湾社会を作り出して来た者としての台湾社会の構成者という認識をみることができよう。

本土化への否定的見解と中華民国という意識を強くもつ彼らにとって，馬

英九の当選は歓迎され，彼が総統になってようやく族群問題は緩和したと認識していた。インフォーマントはすべて馬英九に投票していた。異口同音に馬英九が総統になって族群間の対立が減り，もめ事が少なくなり，社会が安定したという趣旨の発言を行った。中華民国という立場を堅持する馬英九は彼らに中華民国の国民としての居場所を与え，排除されない安心感を与えた。Bが語るように，自分たち外省人を排除しそうな民進党政権が復活するぐらいなら統一志向の共産党政権が「まだまし」であった。

第3節　大陸との接触にみる外省人認識の変容

ここまで見てきたように現在の台湾社会の繁栄に貢献してきたという外省人の認識は，本土化での排除への反動から生まれた。だが，繁栄という認識は単純に台湾で暮らしていることだけから生まれてはいない。大陸との接触において，自らの故郷であった大陸が異質な他者として認識され，その結果，台湾の繁栄を彼らにいっそう実感させ，台湾への愛着を増すものにしている。

第1世代の外省人をディアスポラの問題としてとらえようとする楊孟軒によれば，大陸に住むことが可能となった以後も多くの第1世代の外省人が台湾に住み続け，大陸に住む人間は僅かであることを指摘する。彼らは故郷での生活が自由快適だとは考えられず，故郷に定住するのではなく，故郷を訪れることを選んでいる（楊孟軒［2010: 573-579］）。また，台北県の眷村を調査した何思瞇によれば，彼の調査した眷村の第1世代の外省人は，大陸の故郷に戻るものの「台湾同胞」（台胞）と呼ばれ，故郷を自分が生まれ育っただけの土地と認識し，40年住んだ台湾に深い愛着を覚えるという（何思瞇［2001: 52-54］）。このような第1世代の感情は筆者の調査でもみることができる。

民進党よりも共産党の統治を望むBは大陸への訪問が可能になった後，何度も大陸を訪ねている。2009年の年末に彼女に「もし台湾と大陸が統一さ

れたら大陸の故郷に住む意志があるか」と聞いたところ，彼女は即座に「いいえ」と答えた。その理由を尋ねると，台湾の暮らしが気に入っているという。交通も便利で，好きな映画や劇がみることができ，自由に活動でき，大陸ではそのような生活は無理だからだと語る。さらにきちんと並ばない，大声で話す等大陸はマナーが悪いという（2009年12月調査時）。

花蓮に住む新聞記者のＥは台湾を民主化され，経済が発展し，自由がある国だと述べた。大陸にはそれらがないと語った。彼もＦも台湾から離れるつもりはない。このような台湾を作り上げてきたことに誇りを感じ，ペンを通じてそれに貢献してきたという自負を彼はもっていた（2010年12月調査時）。台湾に独自の文化はないと言い切るＧも大陸に住む気はないという。彼女も大陸の父の故郷を訪れたことがある。台湾は自由だという。大陸は違うのかと聞くと，大陸は共産主義で違うと答えた。彼女は「台湾は自由だし，生活も進んでいて，発展している。そのような台湾が好きだ」と語った（2007年８月調査時）。その思いは2010年８月の調査でも同様であった。

新竹市の眷村博物館等でボランティアをする外省人女性Ｈは，眷村に住んでいた外省人第１世代のなかで大陸に行った人々の多くが台湾に戻って来ていると筆者に教えてくれた（2009年８月調査時）。台湾の生活に慣れた彼らは大陸の生活レベルになじむことができないという。また，お金をもっている間はよいが，お金がなくなると親戚らがまったく相手にしてくれず，寂しい生活になるからだと指摘する。

お金がなくなると大変だという話は，花蓮の第１世代のＤも筆者に教えてくれた。彼自身も故郷に戻って住むことはせず，年に２回ほど訪問する生活を選んでいる。子どもたちも台湾で暮らし，台湾の生活に慣れたと語る。彼のまわりにも大陸に定住することを決め移り住んだ者がいるが，その多くが戻って来ているという。台湾に戻る大きな理由が，お金だと筆者に教えてくれた。お金がなくなると，大陸の親戚らが台湾から移り住んだ外省人に対して無関心になると語る。そのような大陸のあり方に失望して戻って来るという（2010年８月調査時）。

花蓮のＡは大陸の故郷に父親と訪問したことがある。大陸の親戚に初めて会った時，知らず知らずのうちに涙が出たという。だが，自分が大陸に住むことはないと筆者に語った。風呂やトイレ等のレベルが低すぎて，無理だという。数日いるのがやっとだと語る。父の故郷は，自分たちのルーツで，親戚が住む故郷だが，それだけだという。台湾という場所が自分は好きだと筆者に教えてくれた（2010年８月調査時）。

衛生問題は別の外省人女性からも聞いた。台北市内で飲食店を開く40歳代の女性Ｊ（父親が四川省出身）は，やはり父親を連れて大陸の親戚を訪問したことがある。彼女自身もトイレ等の衛生状況が悪くて住むことはないと語る。せいぜい父親を連れて帰るぐらいのもので，自分自身はあまり訪ねる気持ちにもならないという。馬英九は外省人の台湾観光を解禁したが，飲食店をしている彼女は大陸の人間をうるさいと感じていた。どうしてここまで大きな声を出して歩かないといけないのか，わからないと語った。本音をいえば，大陸の人間は嫌いだと語る（2010年３月調査時）。

このように大陸やそこに住む人々との直接的な接触，その拡大は台湾の人々に「同じ民族」という「親近感」だけを生み出してはいない[18]。大陸は自らが戻るべき，アイデンティファイできる場所では決してなかった。言葉等に類似性を感じるものの，むしろ，自分たちの暮らしのレベルや民主化・自由化の度合い，金銭重視の人間関係において大陸は距離を感じる異質な他者であった。大陸の経済的力は大きいものの中華文明の中心としての「中原」ではなかった。その対比のなかで現在の台湾の生活のよさや繁栄を実感していた。つまり，台湾にアイデンティファイする，愛着心をもつ意識には大陸との接触が影響していた。

前節で記したように，彼らは台湾共和国等の台湾ナショナリズムには強く反感を覚えていたが，そのこと自体が台湾を嫌いであることを意味してはいない。大陸との違いを実感したうえで，住み心地のよい，民主化され，発展した台湾を彼らは誇りに思い，大事なものと考えていた。なかには筆者に対して，「愛する」という用語を用いて，台湾での暮らしのよさを示す外省人

も存在した[19]。

たしかに大陸の経済発展は台湾の人々に「台湾は大陸に比べたら小さな島だ」という認識を生み，また大きなビジネスチャンスを与えた。大陸からの観光客受け入れによる観光業の活性化もそのひとつである。そのため台湾にとって大陸が必要だという認識は台湾で強まっている。台湾の大陸への経済的依存は台湾と大陸は切り離せないという認識を外省人も含め台湾の人々にもたらしており，それは外省人に自信を与えている。

だが，その経済的発展に基づく台湾と大陸との関係強化が，外省人に大陸に住むという選択肢や，大陸への生活者としての愛着をもたらしているかは別の問題である。そのことをここで記した事例は示している。加えて経済発展に支えられた認識はその衰退によって変化することは十分に考えられる。

「台湾や自らを台湾中心に考える第１のグループ」，「台湾や自らを中華民国中心に考える第２のグループ」（原文はそれぞれ「第一民間」，「第二民間」）という概念で台湾社会を分析した呉介民と李丁讃は，現在の台湾を「幽閉された独裁国家から離れて，まだ不十分ではあるものの自由と開放に満ちた大海原に航海した」国家だととらえている。強権的な政治への反発と自由の獲得，公害問題への抗議，豊かな自然環境の保護等通じて自らの生活空間を変えてきたのが台湾であるという（呉介民／李丁讃［2008］）。大陸との生活とは異なるのである。

このような過程を経て，国家のあり方を巡って異なった認識をもつ「第一民間」と「第二民間」がその違いを包み込んだまま共に生活できる社会を台湾は目指しており，２人はそれを「生活の場としての台湾」（生活在台湾）と述べる（呉介民／李丁讃［2008］）。筆者が調査した外省人は，大陸とは異なる，この豊かで便利で自由のある台湾で暮らすことに満足感を覚え，自分たちがそのような生活を生み出してきたことに自負を感じていた。台湾において自らの存在は，排除されるべき対象者ではなく，社会を構成するに足る存在だと思っていた。台湾社会の構成者という認識は「生活在台湾」に通じよう。

第４節　眷村にみる台湾のなかの外省人

ここまで指摘した台湾を構成する「我々」という意識は，眷村の保存活動にもみることができる。眷村とは政府が外省人の軍人や公務員，教員等に提供した住宅地区である。国民党とともに台湾に来た約60万人の軍人の居住場所は重要な問題であった。1950年の法律改正によって彼らの集中管理と集住が行われることとなり，それが眷村の始まりといわれている。1980年代の半ばまでに888カ所の眷村が台湾に建築された（何思瞇［2001: 13-23］）。

眷村は本省人，とくに高齢者の間では一般的にコンクリートでできた古い家で，軍人だった貧しい者が住むと思われている。そして，彼らは大陸との統一を支持し，新党や親民党（ともに統一を唱える政党）を応援するという印象がもたれている。本省人からみると，一種隔離された空間である。

1997年に「国軍老旧眷村改建條例」が議会を通過し，現在，眷村の高層マンションへの建替が進んでいる。それに呼応するかのように2000年代半ばから国防部（防衛省に相当）において眷村を保存していく動きが活発化していく。2007年には上記の条例の修正が行われ，文化資産としての整備がいっそう促進される。それはまさしく陳水扁政権下，台湾の本土化が過激な時期であった。これらの動きを受けて，眷村居住者の自己認識，エスニシティ，ジェンダー等に加えて近年，新たに眷村を歴史遺産ととらえる研究[20]や書籍が出版されている。

たとえば，何思瞇は，眷村を外省人の集合意識を示す象徴で，集合記憶の場となる歴史遺産であるととらえる（何思瞇［2001: 193-196］）。桃園県の眷村について書かれた『眷村陪你説故事。』（眷村が語る物語）の序では桃園県文化局長が眷村は「台湾発展史のなかで中国から来た人々について知り得る現存する歴史的な証で，はるかに思いを馳せることができる共同記憶だ」と記す（謝小韞［2006］）。民進党が出版した『認識台灣眷村』（台湾の眷村を知ろう）では，「眷村を台湾の歴史の共同記憶の一部分にする」という見出し

がある（民主進歩黨族群事務部［2006: 242］）。さらに国防部が出した『眷戀——海軍眷村——』（思いを馳せる——海軍の眷村——）の「はしがき」（縁起）においても，「眷村に関わるモノは貴重であり，その保存が重視され，眷村の歴史について現在みることができる証となっている」（國防部［2007: 9］）とある。このように眷村は，共同記憶や集合記憶として保存すべき価値のある建物と2000年代に入って認識されている。

その記憶によって立ち上がる「我々」は台湾であり，記憶の対象も台湾である。すなわち，記憶の主体は台湾である。桃園県文化局長は「台湾発展史のなかで」と述べる。民進党も『認識台灣眷村』で「台湾の歴史の共同記憶」だと明確に述べる。国防部の『眷戀——海軍眷村——』では，「縁起」の冒頭に「国軍の眷村文化の発展は，近代台湾社会の歴史的変化においてきわめて重要な役割を果たし……」と記されている。

また，国防部出版の別の冊子『從竹籬笆到高樓大廈的故事——國軍眷村發展史——』（竹で作られた長屋から高層マンションまでの物語——国軍眷村発展史——）の序では「『眷村』は台湾地域の唯一無二の産物である」と述べられる（國防部史政編譯室［2005］）。加えて，民進党が出した別の書物『眷戀我的台灣村』（私の台湾村を懐かしもう）の序では，桃園県桃籽園文化協會執行長の顔毓瑩が，「台湾の歴史の一部分である眷村の世界を覗いてみよう」と述べ，最後に「私たちの台湾村を一緒に懐かしもう」と呼びかける（顔毓瑩［2006］）。台湾村とは眷村のことである。両者ともに眷村を台湾文化として認定する[21]。

研究書である何思瞇の本を除く一般向けのこれらの書物はいずれも2000年代半ばに出版されている。陳水扁政権下で本土化が促進されるなか，外省人の軍人エリートが多い国防部から，台湾主体性を強調する民進党まで，眷村を台湾文化のひとつとして認識し，共同記憶の装置としてみなす現象が進んだ。

また，2006年の眷村に関する「文化節」（文化週間）では以下の発言があった。この年，管見するかぎり２つの眷村文化節があった。ひとつが台北の

四四南村で８月に実施された台北市主催の眷村文化節と，もうひとつが桃園県亀山において桃園県主催で11月に行われた桃園眷村文化節である（桃園縣桃籽園文化協會［2006］）。筆者は台北市の文化節を調査したが，その時の参加者の一人が「眷村も台湾の文化のひとつであり，台湾文化として保存していくべきだ」と述べていた。陳水扁が推進する本土化の下，外省人の２世であるという彼の発言はまさに外省人社会の象徴のひとつといえる眷村も台湾の歴史を構築するひとつだという主張であった。

以上は2008年春までの民進党政権下での話であるが，台湾の文化，歴史としての眷村という認識は，馬英九政権下でも同じである。2009年の12月に出版された台北県の眷村に関する書物の序では，「眷村は台湾社会であり，生活の一部分であったのであり，台湾の歴史の一部である」（張品／張鑫［2009］）と記してある。また，筆者は2010年の８月に三重市の「空軍三重一村」という元眷村を会場とした台北県主催の眷村文化節を見学した。そこでボランティアをしている外省人２世の男性は，眷村を台湾文化の重要な一部であり，だからこそ，眷村はきちんと保存されるべきであると語った。

類似した発言は眷村に関するほかの文化施設での現地調査（2010年８月）でも聞いた。現在，台湾には眷村に関する文化施設が５つある。ひとつが2004年に信義公民会館としてオープンした台北市の四四南村である。外国籍の文化人が保存運動を開始し，2001年に歴史建築物に指定された。新竹市の眷村博物館は2002年12月に正式に開館した。新竹市に眷村が多いことから文化施設の開館が望まれていたが，壊される建物を使ってようやく開館することとなった。桃園県亀山の眷村故事館はその周囲に住む外省人の人々が連絡する場所としていた建物を，2003年に故事館として利用することで活動を始めた。桃園県の眷村文化節の主要な活動拠点となった場所である。高雄市の高雄市眷村文化館は2007年12月に試験的運営が開始された眷村の展示館である。眷村のなかにあった診療所を新たに改築し，眷村文化館とした。そして最後が，眷村が集中してあった地区を活用した澎湖県の眷村文化園区である。それらのなかで澎湖県を除く眷村の文化施設を調査した[22]。

台北市職員の四四南村館長は眷村が台湾の文化のひとつであると語った。子ども達に眷村の歴史を伝えていくために眷村の保存をしなければならないという。新竹の眷村博物館でボランティアをするHは，眷村は台湾特有の文化で，大陸にはこのようなものはなかったと述べる。新竹の小中学校の子どもが学校教育の一環としてここに学びに来ることがあると教えてくれた。

高雄の眷村文化館で話を聞いたボランティアの70歳代第1世代の外省人男性Kは，なぜ眷村を保存するのですかという筆者の質問に対して，「眷村は台湾の歴史の一部ですから」と答えた。高雄のこのあたりには眷村が多くあったから，このあたりに眷村文化館を作ったという。桃園県の眷村故事館でボランティアをしている20歳代の女性（自分の祖父が外省人で，祖母は本省人）は，急速に失われていく眷村の文化を残すことが必要で，台湾の歴史として重要であると述べた。台湾の文化と大陸の文化が混ざったものが眷村の文化であるという[23]。

眷村に住む父方のオジをもつGは何度もオジの住む台湾中部の眷村を訪ねている。彼女にとって眷村は故郷のような感じがする場所であると語った(2010年8月調査時)[24]。台湾に故郷がない外省人にとって，眷村は「自らの故郷である」と感じさせる場所としてあるという。

これらの語りにおいて特徴的なことは，既述したように眷村について台湾の歴史であると語り，中華民国としてという説明がなかった点である。彼らは当然のように眷村を台湾独自に発展した台湾の歴史の一部，台湾文化のひとつとして考えていた。本省人の高齢者が眷村を閉じられた空間として，台湾の本土化に反対する巣窟のように考えていることとは対照的である[25]。彼らは台湾という社会を構成する存在であることを当然のように考えていた。ここにも台湾社会の一部という外省人の認識をみることができる[26]。

第５節　韓国華僑の台湾認識から考える外省人アイデンティティ

このように自らを台湾の一部とみなす外省人の考え方は，台湾ではなく，中華民国にアイデンティファイする点で似た国家アイデンティティをもつ韓国華僑（王［2002，2008］，上水流／中村［2007］）と比べると，いっそう明確となる。韓国華僑とは韓国への帰化を問わず，韓国で「華僑」（화교）と呼ばれている，あるいは呼ばれていた人々である。アメリカや台湾，大陸等に移り住んだ人々も含み，多くが中華民国籍で，その出身地は約９割が山東省である[27]。台湾に移り住んだ韓国華僑は１万人の説もあるが，台湾韓国華僑協会によると2003年５月29日現在居留者が1553名，居住者が5148名である（上水流／中村［2007］）。

本土化について韓国華僑も外省人と似た考えをもち，本土化で韓国華僑は中華民国から排除されたと考えている。民進党政権時代の2006年夏，ある韓国華僑は「現在の政府は韓国から華僑が台湾に移り住んで欲しくないと思っている」と語った。山東省を故郷とし，大陸に愛着をもつ韓国華僑は本土化を進めたい民進党にとって歓迎せざる存在だからだという。韓国華僑を研究した王恩美によれば，孫文が中華民国を建国し，建国に貢献した蒋介石が総統となり，彼の息子・蒋経国へ権力が継承される中華民国の「正統性」は韓国華僑の中華民国支持の礎になった。だが，韓国華僑は民進党が政権をとり，その「正統性」が失われたと考えた（王［2002］）。現在，韓国華僑の多くが民進党ではなく，国民党の施策を支持する。2008年の総統選挙では筆者が知るかぎり，韓国華僑は大きな期待をもって馬英九に投票した。

中華民国を支持し，馬英九を歓迎する韓国華僑にとって台湾という土地は経済的，政治的に魅力があれば住む場所であり，なければ住む必要がない場所である。王によれば，台湾は韓国華僑にとってアメリカにつぐ人気のある移住先であった。彼らが韓国を離れる理由は主に韓国における高い税金，外国人規制，物価の上昇，労働力不足，中華料理に対する値段制限等が関係し

た（王［2008: 244-245］）。そして台湾の韓国華僑によれば，台湾への移住は複数のパターンがあった。大学進学を目的とする場合とそれ以外である。

まず大学進学を目的とする場合であるが，プッシュ要因は韓国での進学差別である。1976年に大学進学のため韓国から台湾に移り住んだある韓国華僑によれば，当時，韓国では法的に許され，進学が可能であった医学部を除けば，他の学部に華僑が進学することは困難であったという。そのために卒業生の７割から８割が中国語の通じる台湾の大学に進学したという。

台湾側のプル要因としては，1980年代までの状況として当時，国民党が積極的に韓国華僑を受け入れていた点が指摘できる。共産党との争いのなかで正統な中国政権として多くの華僑を国民党が必要としていたためである。インフォーマントによればその点もあり，大学進学を目的とする学生には６年の居留が許可された。さらに入学試験における加点という優遇制度もあった。

大学進学と関係ない場合，展望がみえない韓国での生活に見切りをつけて新天地を求めて台湾に来る者が大半である。祖国中華民国はみたこともない国であるが，資本主義のもと経済的に発展し，ビジネスチャンスも多く，アメリカと違い中国語が通じる台湾は彼らにとって魅力的であった。台湾は1970年代から軽工業やIT産業を中心に1990年代前半まで急速に経済発展が進むが，そのような時にビジネスチャンスを求めて韓国華僑は台湾に来た。

しかし現在台湾の韓国華僑によれば，中国語が通じても台湾に来ることは彼らにとって魅力的にみえないという。まず大学進学だが，現在，台湾の大学への進学者は減少している。韓国側の理由として，韓国の大学が華僑に対する制限を緩めたこと，さらには若い世代の韓国華僑が言語等の点で韓国化しており（綛谷［1998］），韓国での成功を願っていることがある（王［2008: 97］）。

台湾側の理由として優遇政策をなくした点がある。現在，大学進学を目的とした場合，居留が認められる期間は４年であり，かつ加点もない[28]。なかでも年数が減ったことは韓国華僑にとって大学進学の魅力を失わせた。居留許可期間が４年間では大学を卒業して台湾に就職することは時間的に無理だ

からである。その場合，別な国に行かなければならない。ある韓国華僑に言わせると，それは実質的に韓国華僑の台湾の大学進学を拒否するものであるという。

次に台湾の経済力の低下である。韓国華僑を惹きつけた台湾の魅力は経済力にあった。だが，1990年代後半から台湾の経済は停滞し，ビジネスチャンスも限られるようになった。かつ，台湾とは対照的に大陸が経済力をもつようになってきた[29]。

ある韓国華僑は「現在，語学留学でも台湾ではなく，大陸に留学する者が多い」と教えてくれた（2007年８月調査時）。今後は，繁体字ではなく，簡体字の中国語が世界で重要になる。それゆえに子どもたちに簡体字を学ばせるという。ここにも経済力における大陸と台湾の両者の差が反映されている。

上記以外の理由で台湾を離れ，大陸を選ぶ韓国華僑もいる。韓国華僑の大半は戦後，韓国に移り住んできた。彼らの多くは高齢となっている。高齢化のため，自らの故郷を懐かしがり，山東省に戻るという。社会主義か，資本主義か，民主化の程度等は年齢が年齢だけに関係ないという。自らの親族や友人等の顔見知りがまだ大陸にいる者にとって故郷で人生の最後の時を過ごすことは魅力があるという。

馬英九政権を歓迎した韓国華僑だが，現在，大きな不満を覚えている。それらは中華民国台湾に自由に行けないことと，居留証がとりにくいことである。台北でビジネスを行う韓国華僑は，「韓国華僑が台湾に来るのにビザがいるのはおかしくないか。韓国人はいらないのに」と不満を述べた。これは筆者が知る韓国華僑すべてに共通する不満で，2006年から現在まで一貫して聞く声である。正式にはビザではないが，現在，韓国華僑が台湾に来る場合，特別な許可証が必要となっている。彼らにしてみれば，中華民国籍をもつ自分たちが，韓国国民以上に自由に台湾に行けないことが許せないという。

さらに現在，１等親の家族がおり，１年間住んだ者でなければ居留証がもらえない。中華民国籍をもつ国民が自分の国家に住むにあたって居留証が必要なこと自体も不満だが，その取得が李登輝時代以降難しくなったことは本

当に許せないものであった。ある韓国華僑は自分の兄弟の息子が来たが，自分は彼の１親等でないために彼は居留証をとる資格さえなく，オイの携帯電話も自分の居留証で借りていると不満を述べていた（2010年８月調査時）。

これらの不満は李登輝・陳水扁時代に生まれたが，上にみるように現在も続いている。馬英九政権に何度も韓国華僑会として申し入れをしているが，返事は決まり切ったものでまったく改善する意志が感じられず，韓国華僑の待遇が変わっていないからである。外省人インフォーマントの中には馬英九の総統としての能力を疑う者もいたが，族群問題が緩和され，誰も排除しない国民党政府に誰もが満足感を覚えていた。そのような満足感は韓国華僑にはみられない。中華民国の主体性を重視する馬英九政権下でも自分たちは排除されていると感じている。

マスメディアで活躍するある韓国華僑は，「独立賛成ではないが，独立に反対しない」と述べた（2008年１月調査時）。陳水扁政権下での国家アイデンティティの変化を受け入れ，認めている。その彼でさえ，台湾を離れていくことが十分にあり得ると感じていた。台湾独立の場合，安心感がないのであれば，すぐに台湾を離れるという。彼によれば，韓国華僑は台湾にそれほど愛着は感じていない。生活が重要で生活することができなければ，どこでもよいと語る（2010年８月調査時）[30]。

2010年９月にソウルで実施した調査によれば，ソウルに住む韓国華僑にいたっては台湾への愛着はほぼ感じられない。たとえば，韓国華僑の第３代にあたる大学生の男女のうち，女子学生は「台湾は友だちがいるから遊びに行った。面白いところだが，ただそれだけだ」と述べた。男子学生は韓国が戦争に巻き込まれたら，「台湾に逃げる」と答えた。そのような場所として台湾は意味があり，大陸も台湾も同じぐらいの距離感を感じるという。しかしながら，彼らが韓国に愛着を感じるわけでもない（2010年９月調査時）。

大連で15歳まで過ごし，日本の敗戦とともに韓国に渡ってきた80歳の韓国華僑１世は，山東省の故郷と行ったり来たりしている。配偶者も韓国華僑である。韓国華僑の世界において重鎮である彼は中華民国政府に呼ばれて何度

も台湾を訪れている。彼は反共のために頑張ってきたという強い意識をもっていた。李登輝や陳水扁らが進めた本土化には反感をもっていた。台湾には何度も行くが，やはりそれだけの場所であった。特別な感情を台湾にはもっていなかった（2010年９月調査時）。

ソウルの韓国華僑協会で中心的に活動する50歳代の２世の男性は，多くの韓国華僑が韓国に戻って来ていると教えてくれた。彼自身，台湾出身の女性を妻としているが，韓国を離れる気はないと語った。現在は大陸と台湾の両方の活動に参加し，等距離外交をとっているという。台湾は自分の国籍を管理する政府があるところであり，中華人民共和国のパスポートとは違って世界各国で便利に使えるパスポートであることが重要であった（2010年９月調査時）。

このように韓国華僑は外省人と異なる点がある。１つめは韓国華僑にとって台湾への居住は選択肢のひとつでしかないという点である。理念的に大陸も領土とする中華民国・台湾の経済的発展は文化的近接性を背景に，差別的制度があった韓国に住む韓国華僑にとって台湾を魅力的な場所にした。だが，台湾の本土化と，大陸経済の発展やそれと比べた時の台湾経済の停滞は，領土的，経済的魅力を失わせ，同時に韓国華僑の大陸の重視をもたらした。近年，韓国華僑の住所録冊子には山東省の住所も多い。

次に韓国華僑において「この豊かな台湾社会の構築に貢献した我々」という意識がない点である。そのような発言は一切聞くことはなかった。大学生の頃に台湾に来た韓国華僑の場合，ずっと住んでいる外省人２世，３世とは異なることが予想される。だが，外省人１世でさえ人生の途中から台湾に来たが，貧しい台湾をここまで豊かにしたという自負心を彼らはもっており，それと比べると，韓国華僑にそのような自負心はない。

彼らは移住の動機が示すように，韓国よりすでに豊かであった台湾に来たのであり，その富を求めてきた存在であった。したがって，豊かさにかげりがみえてきた台湾に見切りをつけることもする。彼らのインタビューにおいて，調査を開始した2000年代半ばから現在まで繰り返し出てくるのは，「現

在の韓国に比べると……」,「現在の大陸の経済発展に比べると……」という言い回しである。台湾の豊かさは比較の対象である。

最後は自分たちが置かれている立場への不満についての理由が外省人と韓国華僑では異なる点である。外省人の場合，台湾社会の構築に貢献した自分たちの排除が問題となる。「貢献したのにいまさらなぜ排除なのか」という訳である。台湾社会の構成者としての認識がここに存在する。だが，韓国華僑はそうではない。国民としての正当な権利を保障されていないことに対する不満である。中華民国の国籍をもつ国民であるのに，なぜ排除するのかという理由からである。

まとめ

1990年代の半ば，筆者が話を聞いた外省人１世Ｈ（福建省福州出身）は，自宅で外省人１世の妻が作った料理を筆者にふるまってくれた。彼は「我々外省人は台湾では中国人といわれ，大陸では『台胞』といわれ，どうしたらいいのだ」と語った。どちらの社会からも完全には受け入れられず，なじめない，すなわち安心して暮らせる「母国」が存在しない外省人１世は，楊孟軒が述べるようにディアスポラという問題に定位し，考える必要があろう（楊孟軒［2010］）。

だが，同時に1990年代の半ばから15年を経た現在，新たな状況が生まれていると筆者は考えている。李登輝と陳水扁による本土化は，２世，３世も含めた外省人に重要な影響を与えた。彼らが本土化のなかで感じとった「おまえ達はよそ者だ」というメッセージは，彼らが台湾に住む正当な権利があることを，豊かな台湾社会の構築への貢献という理由から強く意識させた。それまでも貢献した自分たちという意識は存在していたが，本土化という排除を受けていっそうその貢献の意義を理解した。

また大陸との直接的な広範な接触の拡大は，大陸が懐かしい故郷というよ

りも，生活レベルや人間関係，公共性という点で違和感を覚えさせた。１世にとっては，違和感なく存在した土地が慣れない異質なものに感じる経験でもあった。２世，３世にとっては親の故郷に過ぎず，なじめない場所であった。国家として台湾に圧力をかける共産党に対する反発は外省人のなかにもあるが，これらの違和感はそれとは異なるもので，生活世界においても大陸はなじめない異質な他者として存在する。このような大陸像は，直接の往来がない，または極端に制限されていた時代にはあり得ず，1980年代末から徐々に拡大された接触によって生じた現象である。

台湾社会の構成者という意識は，眷村に対する認識からもみることができる。一部の外省人にとって眷村は自らの故郷を想起させるノスタルジアの装置であり，筆者が接した外省人は台湾の歴史や文化の一部分として保存されるべきものと考えていた。

中華民国としての台湾に対する愛着は，中華民国を愛する韓国華僑と比べても異なっていた。韓国華僑の場合，排除に対する不満は国民としての権利への侵害がその根本に存在した。だが，筆者が調査した外省人の場合，そうではなく，この社会を自ら作り上げてきた点に誇りをもっていた。在台韓国華僑にとって，台湾は選択肢のひとつに過ぎなかった。その社会を作ってきたという意識もなかった。哲学者ロックの「自分が所有するものを自ら用益することによって得たものは，また自分のものだ」という所有論にしたがえば，外省人にとって台湾は自らが所有すべき権利をもつ土地であった。台湾社会への不満における韓国華僑との違いは外省人を理解するうえで重要である。

ただし，台湾への愛着が外省人の行動等文化における台湾化（閩南語を積極的に習得するなど）を意味してはない。また，コルキュフが述べる台湾趨向性として，本章で取り上げた人々を位置づけることもできない。筆者のインフォーマントは，台湾趨向性の代表的特徴である「中華民国在台湾」（中華民国は台湾にあり）を受けいれてはおらず，台湾に帰属しているという意識も形成していない。あくまでも中華民国へ帰属している。また，本省人総

統誕生を自然な流れとも考えてはいないからである。大陸への違和感と台湾社会の豊かさ，そこに貢献してきた自分たちという意識は，当然ながら台湾独立を主張する台湾ナショナリズムとは異なる。彼らが支持するのは中華民国であり，台湾共和国ではない。

コルキュフは台湾趨向性をもつ外省人の増加を指摘する。その点は筆者自身も外省人に関する実地調査を通じて同意できる。だが，改めて検討したい対象は，国家アイデンティティについて台湾趨向性をもっているとはいえない，強い反本土化の意識をもつ外省人である。すなわち本章で紹介した人々であり，彼らは台湾という国家への帰属は拒否する。そのような，台湾趨向性をもたない彼らでさえ台湾という土地や社会に対して，生活する者として社会の構成者として，自らを認識している。この点は台湾の求心力と遠心力をみる点で重要であろう。これまでの研究のように台湾文化への同化か否か，国家アイデンティティは何かという視点だけで外省人と台湾との関係を分析してもとらえられない心理的様態を彼らはもっている。

〔注〕

(1) 台湾では中国本土を「大陸」と一般的に称する。本章でもその用法に倣う。理由は中国本土と述べると，その言葉自体に中国が本土で台湾はその周辺という意味合いをもってしまうこと，ならびに「中国」という表記は中華人民共和国，中華民国等政治的に複雑な意味をもつためである。

(2) 160万人という説もあり，いずれも正確な数字はわかっていない。

(3) ただし，外省人，とくに第１世代が自らを外省人と自称することは少ない。「外省人」という単語は，元来，本省人が他称する用語で，外省人と称される人々の多くは出身地に基づき広東人や山東人等と自称し，外省人と呼ばれることに不快感を示すことがある。なお，1940年代後半の新聞には「内地人」という表記もあった。

(4) 外省人対本省人という二項対立的な台湾社会の理解は複雑な台湾の政治的，文化的問題を単純化させるために極力避けるべきだが，外省人の視点から考察することが研究プロジェクトの課題であるため，この問題については留保しておく。

ただし外省人対本省人という問題設定は外省人内部の複雑さを覆い隠すものであると1990年代には批判が出ている。そのような研究としてたとえば，

趙剛と侯念祖は，外省人女性について，1960年以前と以後では女性が就ける職業が異なることから，その変わり目にあった外省人2世の女性に対して外省人男性が異なった印象をもつと分析する（趙剛／侯念祖［1995］）。趙剛と侯念祖はさらに男性中心のシステム維持において外省人女性が犠牲になっているとも述べる。趙彦寧も父権という権威のもと女性の主体性が侵犯されている状況を論じる（趙彦寧［2001，2004］）。これらの研究はいずれも外省人という括りによって隠蔽されている女性，生殖，主体性，世代等の問題の重要性を指摘し，外省人対本省人という二項対立的研究の限界へ目を向けさせる。なお，趙剛の立場と議論については第5章も参照のこと。

(5)　台湾の独自性を強く否定する外省人の割合は，統計的データをもっておらず，確かなことはいえない。ただ，世代が下がるほどその割合は低いと調査を通じて実感した。若年層の場合，中華民国と台湾をイコールで考え，区別できない者もおり，台湾の独自性を否定する人物を探すことは難しかった。他方，高齢者の外省人では，本土化を否定する人物が多く，それを歓迎する人はいなかった。

(6)　王甫昌は「戸口普査」（日本の国勢調査に類似）における「籍貫」（父系で辿る出身地）の分析を通じて，出身地の「省籍」と「族群」との関係について興味深い指摘を行っている。「省籍」は，国民党の台湾統治当初，日本の植民地統治を受け，中国の人間であるという認識が薄い本省人に「自らが大陸から来た」という認識をもたせるうえで重要であったという。すなわち，中華民国の国体の維持という点で省籍は「中国」と不可分であったと分析する。だが，政治的変化のなかで省籍対立の激化や外省人への不利益の招来，中国の正統な統治継承者というシステムの崩壊等による台湾主体の社会の構築によって，人々を区分する基準が「省籍」から「族群」へと変化したという（王甫昌［2005］）。王甫昌の指摘は「省籍」や「族群」の構築性を如実に示しており，「族群」や「省籍」の対立を脱構築していく足がかりとなる。

(7)　台湾では公用語である標準中国語を「国語」と称す。

(8)　定着という問題について，胡台麗は栄民が台湾に定住し「蕃薯」（台湾人）になる現象が認められると述べている。だが，同時に台湾人になることが，大陸との分離や，統一・独立問題になるのであれば，栄民は台湾人になることを拒否するとも述べる（胡台麗［1990］）。したがって，本格的に外省人の土着化を社会科学から指摘したのはコルキュフといえよう。なお，台湾では，「蕃薯」とはサツマイモのことで台湾と形が似ていることから本省人を「蕃薯」とよぶ。一方，「芋仔」は外省人を指す。胡台麗は「芋仔」を寄住者，「蕃薯」を定住者とするが，定住者がどのような国家アイデンティティをもつのかは検討していない。

(9)　台湾では「原住民」と表記される。日本の植民地時代「高砂族」と呼ばれ

た人々で，山間部に住むことが多かったため戦後は高山族や「山胞」（山地の同胞）等と呼ばれてきた。だが，1990年代，先住民族の権利意識が高まり，もともと台湾に住んでいた人々ということで正式に「原住民」という呼称が認められるようになった。1990年代半ばは９つの民族であったが，現在は14の民族が先住民族として認められている。

⑽　二二八事件とは1947年２月28日に台北市から始まった本省人による国民党・外省人に対する抵抗運動とそれに対する陳儀を中心とする国民党（軍も含めた）による弾圧という一連の出来事。この事件の正確な死者数は不明で，数千人から十数万人といわれる。1992年に行政院（内閣に相当）が政府として公式に二二八事件を認めた。この事件は長くないものとされていたため，被害者や遺族を含め誰もがこの事件や家族を失った悲しみを話すことができなかった（密告された場合処刑・処罰の対象となる）。そのため本省人の人々に深い心の傷を残した。なお，外省人の被害者も存在する。

⑾　1940年代終わりから1950年代初頭にかけて，共産主義や反政府活動を取り締まることを目的とした為政者国民党政府による台湾人民に対する弾圧行為。1949年５月から台湾では台湾省主席兼台湾省警備総司令の陳誠によって戒厳令がひかれ，その間，正当な手続きを経ない裁判で人々を裁くことができた。白色テロによる被害者は20万人とも言われている。外省人の被害者も存在する。

⑿　ただ，台湾において，急進的な独立派，統一派はおのおの人口の15％程度であり，残りの７割は現状維持である。

⒀　第１世代の外省人の国語もその流暢さには大きな違いがある。国語は北京を中心とした北方の言葉を基にするもので，戦前の大陸において全国的に浸透していたわけではなかった。したがって，実際には国語は外省人の一部にとっても，母語とも母国語ともいえないものであった（何萬順［2009］）。

⒁　この事件に関する溝は深い。外省人の見方については現地調査で以下のような話を聞いた。ある30歳代外省人男性は「外省人にも被害者はいたのに，なぜ本省人だけが被害者の顔をするのか」と反論した。80歳代外省人女性は，「よくわからないが，国民党だけが悪いわけではない」と語った。20歳代外省人女性は「国民党は謝るべきだが，いくら謝罪しても許してはくれないでしょう」と述べた。

⒂　筆者の外省人に対する調査は2006年から開始し，複数の研究プロジェクトのもと断続的に行ってきた。それらの主要な目的は，台湾の求心力と遠心力を探る本プロジェクト以外では，台湾における日本認識と中国や中華との関係を明らかにするものである。インフォーマントの多くは台北および花蓮に居住している。このほか，台北，新竹，高雄，桃園，新北の眷村の展示館を訪問し，関係者に話を聞いた。本章で取り上げるインフォーマントの属性や

眷村の展示館については付表１と付表２にまとめた。

⑯　この点をＤがわざわざ述べた理由は，外省人が台湾の豊かさを奪ってばかりいるという考え方を意識したからだと思われる。高齢の本省人のなかには日本が去り，国民党が台湾に来たことを「犬が去って，豚が来た」と語る者がいる。その意味は「日本は門番ぐらいにはなったが，国民党はただ食べるだけでなんら役に立たない」というものである。Ｄは「外省人の我々は台湾社会に役立ち，無駄飯を食べたのではない」と強調したのである。

⑰　なお，国民党，党エリートのマネジメントが台湾の経済発展において重要であったという評価はある（彭懐恩［1991］）。

⑱　大陸や大陸の人間を批判し，他者とみなすことは，詳述しないが本省人のインフォーマントにもより激しい形でみることができる。

⑲　行政院文化建設委員会が出した地域の文化資産に関する報告書は，国民党と民進党との政治的争いのなかで自らを何者と考え，台湾をどう位置づけるかという主体性の議論が独立派と統一派との対立に巻き込まれていると問題点を指摘し，それを乗り越える方策として「愛台湾」という概念を提示する。日常生活において台湾という土地を大切にしようという主張である（行政院文化建設委員會［2008］）。

⑳　眷村の先行研究については，何思瞇［2001］に詳しい。なお，2000年代半ば，民進党は外省人を取り込むために積極的にさまざまな活動を行っている。たとえば，2005年９月の「跨族群青年営」（族群を超えての合宿），10月の「中華文化與台湾本土化」（中華文化と台湾本土化）シンポジウム等である（民主進歩黨族群事務部［2006: 249］）。

㉑　2010年８月の現地調査で筆者がみた『眷念新竹市眷村博物館文物專輯』（林松著　新竹市政府文化局　2004年）の「五十年来的生活記憶」（ここ50年間の生活の思い出）でも第２世代外省人が台湾のために眷村文化を文化的史料として残したと記している。

㉒　澎湖県の眷村文化園区は今後の調査課題とする。空軍三重一村も現在，文化園区として整備中である。

㉓　眷村を分析した張雲翔は，国家として中華民国，日本，社会として中国大陸，台湾が交錯し形成されたものが眷村だと述べる（張雲翔［2009］）。

㉔　眷村の建築保存を研究する呂尹超によれば，1990年代から進められ，地域の絆を作り出す「コミュニティ創造」（社区営造）が眷村保存や活用の原動力として大きく作用し，外省人にとって社区営造の舞台が眷村だったという。筆者もこの要素があると考える。

㉕　眷村保存に時代の違いを感じ，驚き，反感を示す本省人インフォーマントもいる。

㉖　筆者が空軍三重一村でみた『眷村　二零零八』の「青潭新村」の部分には，

「中華民国がなければ眷村はなかった」という表記もあった。だが，本章で記すように眷村は台湾社会の一部という認識が中心である。なお，この書籍は最終的に購入できず，現在，収集中である。

(27) 山東省以外では，河北省と東北の各省出身が約７％，このほか，広東，河南，山西等の出身者がいる（韓國華僑服務站　http://www.ocac.net/korea/，2007年４月30日アクセス）。

(28) インフォーマントによれば，年数が変わって十数年になるという。この点は今後，公的資料で確認を行いたい。ただ，「独立を希求する李登輝が選挙で選ばれて総統になった頃から，韓国華僑への政策は変わってきました」と言うように居留期間の短期化もその脈絡で彼らは理解する。

(29) 大陸の存在は韓国でも大きい。ソウルの街には「中国語学院」（塾）の広告が多くみられ，書店には大陸関連の書籍が数多く並ぶ。また，近年，さびれていたチャイナタウンは次々と再開発されている。韓国政府は韓国華僑や在韓中国人に大陸との貿易による経済効果を期待している（上水流／中村［2007］）。

(30) 別のインフォーマントは，子どもたちが台湾への愛着をもっており，自らはもう韓国には戻る気はないと語った（2007年８月調査時）。国際大会では台湾のチームを応援し，台湾のアイドルを好きな子どもをみて，彼らは台湾化していると語る。かつ，朝鮮語をうまく話せない子どもをみて，その思いを強めていた。彼自身は台湾に強い愛着はもっていなかった。

【参考文献】

＜日本語文献＞

王恩美［2002］「揺れ動き始めた韓国華僑のアイデンティティ――『韓中日報』に表れたナショナル・アイデンティティの検討を中心に――」（『一橋論叢』第128巻第３号　９月　310-329ページ）。

――［2008］『東アジア現代史のなかの韓国華僑――冷戦体制と「祖国」意識――』三元社。

小熊英二［1998］『〈日本人〉の境界』新曜社。

何義麟［2008］「解説」（ステファン・コルキュフ，上水流久彦／西村一之訳『台湾外省人の現在――変容する国家とそのアイデンティティ――』風響社225-248ページ）。

上水流久彦［2007］「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」（『アジア社会文化研究』第８号　３月　84-109ページ）。

上水流久彦／中村八重［2007］「東アジアの政治的変化にみる越境――台湾の韓国華僑にとっての中華民国――」（『広島県立大学論集』第11巻第１号　８月　61-72ページ）。
綛谷智雄［1998］「在韓華僑の生活世界――『在韓華僑エスニシティ』の形成・維持・変化――」（『アジア研究』第44号第２号　３月　109-138ページ）。

＜中国語文献＞
蔡淑鈴［2001］「語言使用與職業階層化的關係――比較台灣男性的族群差異――」（『台灣社會學』第１期　６月　pp. 65-111）。
高格孚［2004］『風和日暖　台灣外省人與國家認同的轉變』台北　允晨文化（ステファン・コルキュフ著，上水流久彦／西村一之訳『台湾外省人の現在―変容する国家とそのアイデンティティ――』風響社　2008年）。
國防部史政編譯室［2005］『從竹籬笆到高樓大廈的故事――國軍眷村發展史――』台北。
國防部［2007］『眷戀――海軍眷村――』台北　國防部部長辦公室。
何思瞇［2001］『臺北縣眷村調查研究』台北縣　臺北縣政府文化局。
何萬順［2009］「語言與族群認同――從台灣外省族群的母語與台灣華語談起――」（*Language and Linguistics,*　第10巻第２期　pp. 375-419）。
胡台麗［1990］「芋仔與蕃薯――台灣『榮民』的族群關係與認同――」（『中央研究院民族學研究所集刊』第69期　春季　pp. 107-132）。
民主進步黨族群事務部［2006］『認識台灣眷村』台北　民主進步黨。
彭懷恩［1991］『台灣發展的政治經濟分析』台北　風雲論壇出版社。
桃園縣桃籽園文化協會［2006］『2006桃園眷村文化節　眷村進行式・眷村研討會研討會資料手冊』桃園縣　桃園縣政府文化局。
王甫昌［1998］「族群意識，民族主義與政黨支持――一九九〇年代台灣的族群政治――」，（『台灣社會學研究』第２期　７月　pp. 1-45）。
――［2005］「由『中國省籍』到『台灣族群』――戸口普查籍別類屬轉變之分析――」（『台灣社會學』第９期　６月　pp. 59-117）。
呉介民／李丁讃［2008］「生活在台灣――選擧民主及其不足――」（王宏仁／李廣均／龔宜君編『跨戒――流動與堅持的台灣社會――』台北　群學出版　pp. 37-69）。
謝小韞［2006］「序　眷村・外省人」（桃園縣桃籽園文化協會『眷村陪你説故事。』桃園縣　桃園縣政府文化局　pp. 2-3）。
行政院文化建設委員會［2008］『96年度區域型文化資産環境保存及活化計畫　社區及民間組織輔導團成果專輯』台北　行政院文化建設委員會文化資産總管理處籌備處。
顔毓瑩［2006］「桃籽園文化協會序」（桃園縣桃籽園文化協會『眷戀我的台灣村』

台北　民主進步黨　pp. 4-5)。
楊孟軒［2010］「五零年代外省中下階層軍民在臺灣的社會史初探——黨國，階級，身分流動，社會脈絡，兼外省大遷徒在『離散研究』diaspora studies 中的定位——」(鄭欽仁編『中華民國流亡台灣60年暨戰後台灣國際處境』台北　前衛出版社　pp. 508-584)。
張品／張鑫［2009］『眷村2009　台北縣眷村分布與眷村文化保存』台北　臺北縣政府文化局。
張雲翔［2009］「台灣眷村歷史脈絡與保存範疇——以國家與社會觀點分析——」(『台灣資料研究』第34卷　pp. 130-151)。
趙剛／侯念祖［1995］「認同政治的代罪羔羊——父權體制及論述下的眷村女性——」(『台灣社會研究季刊』第19期　6 月　pp. 125-163)。
趙彥寧［2001］「戴著草帽到處旅行——試論中國流亡，女性主體，與記憶間的建構關係——」(『台灣社會研究季刊』第41期　3 月　pp. 53-97)。
——［2004］「公民身分，現代國家與親密生活——以老單身榮民與『大陸新娘』的婚姻為研究案例——」(『台灣社會學』第 8 期　pp. 1-41)。

付表１　インフォーマント一覧

記号	性別	年齢	世代	祖籍地[1)]	職業	居住地[2)]
陳Ａ	男性	30歳代	第２世代	江蘇省	会社経営	花蓮
許Ｂ	女性	80歳代	第１世代	江蘇省	元教師	台北
黄Ｃ	男性	40歳代	第２世代	四川省	民宿経営者・元軍人	花蓮
林Ｄ	男性	80歳代	第１世代	浙江省	元軍人	花蓮
呉Ｅ	男性	60歳代	第１世代	河南省	新聞記者	花蓮
楊Ｆ	女性	60歳代	第１世代	河南省	主婦	花蓮
洪Ｇ	女性	20歳代	第３世代	四川省	学生	台北
傳Ｈ	女性	40歳代	第２世代	未回答	ボランティア	新竹
顔Ｉ	女性	50歳代	第２世代	未回答	公務員	台北
趙Ｊ	女性	40歳代	第２世代	四川省	飲食店経営	台北
孫Ｈ	男性	60歳代	第１世代	福建省	ボランティア	台北

（出所）筆者作成。

（注）　このほか，眷村の展示館でのインタビュー対象者が存在する。訪問箇所は付表２を参照。

1）　祖籍地とは，第１世代は出身地，それ以外は祖先（父系でたどる）が台湾に移り住んでくる前の出身地。

2）　居住地は調査時の居住地。

付表２　訪問した眷村の展示館施設一覧

所属地	名称	補足説明
台北市	四四南村	信義公民開館として開設
桃園県	眷村故事館	
新竹市	眷村博物館	
高雄市	眷村文化館	
新北市	三重一村	文化ウィーク会場

（出所）筆者作成。